

ん。

生死の分からない、吉秋、吉夫の二人の兄は、何の手掛かりも情報もないのです。だれかこの二人を知っている人はいませんか、私はいつも心の中で叫んでいます。

私たち親子の絆を裂いたこの戦争は、憎んでも憎みきれません。直接に戦争の記憶がなく育ってきた私は、自分ばかりが苦勞してきたと思ひ込んでいましたが、母や兄や姉たちに比べたら何と幸せ者なんだろう、母の愛をひとりじめできたのだからと、このごろになってやっと気付きました。

私が子供のころのこの山は、悲しく、辛く、わびしく、寒い思い出だけでしたが、次々と入植する家が増えて三百戸が生活するようになりました。山の畑も努力のおかげで肥沃になり、すべての作物がよくとれるようになりました。土地があるありがたさを実感しています。今ではこの地をこよなく愛しています。

しかし、ここに至るまでの苦勞は、母も私も絶対に忘れられません。

明治・大正・昭和・平成と苦難の連続の道を生き抜いて、やっと平穩な人間らしい生活に落ち着いた母は、私の宝物です。

今、母と共に思い出を語り合い、平和な日々を過ごせる幸福は、ただで得たものではないのです。あの戦争、そして引揚げの中で亡くなった多くの方々のお陰なのです。

この平和のありがたさを、世の人々と共に守り、維持することの大切さを痛感する毎日です。

## 私の悩み、いつまで続くのか？

福島県 加藤 トシ

一 満州へ

私は、大正十三年に福島県三和村で、加藤久一の次女として生まれました。私が八歳のときに母が亡くなりました。姉が十二歳、妹が四歳でした。母の死後は本当に寂しい思いをしました。父は、冬には遠くに働

きに行つて、長い間帰つて来ないときもありました。姉妹三人、田舎の大きな家で夜は寂しくて、みんな泣いたことが何度もありました。

そして一年ほどたって、継母が女の子を一人連れてきたので、家の中もにぎやかになりました。その子は妹と同じ年だったので、毎日仲良く遊びました。家が貧しかったので、私は小学校四年でよその家に子守に行きました。初めて親から離れて暮らしたので、家が恋しくて夜など何度も泣きました。私は十八歳までよその家で働きました。

ある日父が、満州に行けば土地がたくさんもらえるから、こんな狭い日本にいるより大陸の広いところに行こうと言つて、原畑の佐藤さんの一家と一緒に満州に行くことになりました。

私の姉は結婚して子供が一人いたので、残ることになりました。姉は「私を置いて行くのか」と言いましたが、父は「今では満州は隣村と同じだから」と言つて姉を慰めました。

昭和十七年三月に、我が家と佐藤家は出発すること

になりました。

その日は、小学校のみんなが町外れまで乗隊付きで送つてくれました。郡山駅から汽車に乗りましたが、車窓から姉の泣いている姿を見て、いつまでもその姿が臉から消えませんでした。切ない別れでした。私は汽車に酔つてしまい、どこを見ることもできずに神戸に着きました。乗り込んだ船が玄界灘ではひどく揺れて、みんなが船酔いで大変でした。そして二日後に大連に着きました。

大連は日本とは違う世界で、人の多いことに驚きました。駅で働く満人が私たちをじろじろ見て、何か分らない話をしていました。大連からまた汽車に乗ると、車内は満人でいっぱいでした。満人はにんにくを食べるので、臭いがひどいうえに、私は汽車に酔つて外の景色など見ることもできません。ようやく佳木斯駅に着きました。

佳木斯の大禅寺という寺は開拓団員の泊まる所ですが、そこで一晚泊まり、翌日迎えのトラックで開拓団に行きました。日本を発つ時は三月で暖かかったので

すが、佳木斯はまだ雪もあり寒く、道中に見る満人部落や、ロバを引いて歩く人や、並木道などの景色、本当に大陸の広さに驚きました。トラックに揺られながら、やっとの思いで三江省筆架山開拓団に到着しました。着いたころはもう暗くなっていて雪が白く見え、寒いこと寒いこと。寝るときは、土の床を温めたオンドルにアンペラを敷いて寝るのですが、私はそれに慣れなくて毎日頭痛がしていました。

四月になると段々と暖かくなってきて、畑のまき付けが始まりました。満州の畑の畝が長いには驚きました。私たちが畑の除草に行っても、半日かかって一本の畝がやっとなす。満州の土はとても良い土で、何でもよく育ちました。馬鈴薯や南瓜、豆、粟、みんな良く成長するので、本当にびっくりしてやっぱり満州に来てよかったです、つくつく思いました。

春から夏、秋まで野原には色とりどりの花が咲き、百合の花が咲くころには地面が赤くなり、桔梗の花が咲けば一面の紫に変わります。山には芍薬などが本当に美しく咲いていました。

開拓団の前には筆架山という山があって、その山はとて姿がよく公園みたいな所もあります。私たちはその山に登ってはるか遠くを眺め、大陸の広さに驚きました。松花江が光って見え、その向こうはソ連、南を見れば山また山と続きます。でもとても怖い狼がいて、夜などうっかり外には出られません。

秋になって、畑から豆やトウモロコシなどの収穫物を運びました。入植して一年は食べ物に困りましたが、あとは私たちが作った作物を食べられるようになり、やっとな安心できました。

そのころ、軍で使っていた馬が一戸に雄雌二頭ずつ支給されたので喜びました。馬は騎兵の乗馬で、馬車を引いたことのない馬だったので、部落の人がみんなで力を合わせて馬車引きの練習をさせました。父も一生懸命でした。

## 二 父の死

私と妹フデ子と二人で畑仕事をしていたとき、家の馬車が暴走してきました。私は怖くてどうしようかと思っていると、妹フミ子が泣き叫びながら「姉さん、

姉さん早く！」と呼びに来ました。私は悪い予感がして歩けなくなってしまう、やっとの思いで家の近くに行くのと、部落の人々が集まってその中に父の血まみれの姿を見ました。私はどうしてよいか、夢中で「父さん、父さん！」と、ただ泣きすがりました。

父は遠い街の病院にも行けず、団の診療所に入院して十日ほどで亡くなりました。その間の私の心は悲しいやら、悔しいやらで、例えようもなく呆然とした日を過ごしました。

大陸に来てただ一人の頼りである父に死なれて、どうしたらよいのか嘆くばかりでした。母と、妹二人、弟二人はまだ幼く、私が一家六人の柱となるなんて、とても考えられずに本当に迷い悩みました。

隣家の山田さんが励ましてくれたので、本当に助かりました。何から何までどれほどお世話になったことか。奥さんとても優しい人で、すっかり頼りにしてしまいました。山田さんが兵隊に行った後は、満人の老人を頼んで一生懸命に家のために働いていました。

私は、小さいときから姉と別れて働いていたので、

姉の良さなど分からなかったのですが、山田さんの奥さんを姉のように思いました。風呂にも奥さんと一緒に行きました。私は奥さんを一生忘れることはできません。

父の死んだ後、私は他の家に負けないように必死になって働きました。朝早く妹二人を起こして畑仕事や草刈りをしましたが、牛も山羊もいたので大変な労働でした。忘れることのできないのは、妹と三人で草刈りに行く途中に満人のまくわ瓜の畑があり、その瓜は甘くとてもおいしいのです。私たちは食べたいがお金がないので、母に隠れて米を持ち出し、まくわ瓜と交換して食べました。そのおいしかったこと、今思っても生唾が出るようです。あのころの満人は、米など食べるのができなかったので喜んで交換してくれたのです。

山にはワラビがたくさんありましたが、満人はあまり食べないようでした。ある日、妹と三人で山に入り、裏山まで行ってたくさん採りました。それからその辺りでおにぎりを食べ始めたら、「ウオー！」と突

然に狼のうなり声が響き、私たちはびっくりして荷物を落しながら大騒ぎして逃げ出しました。青くなつてひと山越すと、団の人たちがいたのでやっと安心しました。とたんに膝がガクガクして歩けなくなりしました。驚いて腰が抜けたとはいいますが、私の場合は膝が抜けたことになり後で大笑いしました。

秋の収穫は国に納めるので、遠く離れた集賢鎮まで運ぶのですが、うちには男手がないので私が馬車を引いて行きました。母が部落の人に頼んで馬車列の中に入れてもらい、朝暗いうちに出て、昼ごろに着きました。満人は、日本の女が馬車を引いてきたと、物珍しそうに私を見ていました。帰りには山田さんが連れて帰ってくれました。

満州に来て三年が過ぎるころには、男はほとんど召集されて、私たちも毎日見送りをしました。ついに病院の先生までが行ってしまい、残ったのは老人、女、子供だけとなり、何だか働く気もなくなり、このまま日本は戦争に負けるのではないかと思ひ始めました。

### 三 逃避行

ある日、団の人で軍隊から戻ってきた人が「早く、みんなで団を出るように」と言いました。私たちは驚き、日本が戦争に負けるのかと思ひました。それからすぐに「荷物を持って本部に集まるように」との命令が出ました。この時、妹のフミ子は佳木斯にお産の手伝いに行っていたので、私はどうしたらよいかと迷いました。本部前に集まって相談しているときに、ソ連軍の砲弾がドカンドカンと付近に落下したので、「それ、逃げる！」とばかりに慌てて逃げました。もう散り散りでした。

私の家では、雌馬が子馬を産んだばかりで、車を引かせるのがかわいそうで私は泣きました。馬車に着物や食糧を積んで、私が手綱をとって出発しました。

雨が降ったばかりで道が悪いので難儀しました。三部落の面川さんと奥さんの二人で引いていた馬車がひっくり返り、「助けてくれ」と叫んでいても、だれも助けようとせずわれ先にと走って行きました。団にいた満人が泣きながら追いかけてきて、「団長夫人が

まだ団にいるから、みんな待ってくれ」と叫ぶのに、だれもが先を争って泥道を走りました。

富錦街から逃げてきた人たちも、みんな夜道を泣きながら歩きました。満人たちもいろんな荷物を持って山に逃げると言っていました。私たちは、佳木斯に向かって必死に歩き、腹がへつたらトウモロコシ畑に入っ  
て生でかじり、そのうちに道が悪くなって、馬車を捨てて裸足で歩きました。

私は弟の辰男を背負って、みんなから離れては大変と必死で歩きながら、フミ子のこと忘れられず、もし見つからなかったらどうしようという口には出せない切ない思いでした。

二部落の渡辺さんの次男は十九歳でしたが、病気で歩けないのでお父さんに背負われていましたが、「僕はまだ死ぬのだから、ここに置いて逃げて！」と言っていました。どうしても捨てることなどできずにいましたが、そのうちに亡くなったので道端に埋め、泣きながら去りました。同じ二部落の吉田さんの奥さんもお産間近で、大きなお腹で馬車に乗っていましたが、

避難行の途中で馬車の上でお産をし、それからすぐに歩きましたが、あんなに苦勞したけれど元気で日本に帰りました。

私たちが佳木斯に向かって歩いていると、一人の騎馬兵が走ってきて、「早く行かないと、日本に向かう最後の列車に間に合わないぞ」と言ったので、それは大変だとみんなは駆け出しました。私も日本に帰れないと大変とばかりに、辰男を背負って無我夢中で走りました。私が必死に走るのに、辰男は何も知らずに背中で眠ってしまい、余計に重く感じました。団の学校の石橋先生が「辰男君、眠っては駄目よ、お姉さんが重いから」と言っても、辰男は分からず眠っていました。

ようやく佳木斯に着き、駅が見えてきたら安心したのか足が痛いのに気付き、足の裏を見たら血が出ていました。夢中で走っているには何も分からなかったのですが、裸足で砂利道を走ったのでは血が出るのは当たり前と思うと、もう一歩も歩けなくなり、仕方なく辰男を歩かせて、私は四つんばいでやっと駅に着

きました。

駅には兵隊さんがたくさんいました。列車に乗ったとき、私はフミ子がいなかったと夢中で捜しましたが、気が狂いそうでした。軍の隊長さんが私たちを無事に哈爾濱まで送ると話してくれ、みんな『君が代』を歌ったときは、私たちはいつ死ぬか分からないと思いました。こうして私たちは佳木斯を発つ最後の列車に、やっと間に合って乗れたのです。

ソ連の飛行機が来ると、列車から降りて草むらに隠れ、飛行機が去ると、また乗り込んで夜間だけ走り、日中は草むらに隠れ、毎日怖い思いでした。

ある日、列車が走っていたらドカンという音がして、危うく河に落ちそうになり、みんなはびっくりしました。ソ連兵が線路を爆破したのです。危ないところで命拾いをしました。

列車が走れなくなったので、みんなは草むらに潜んでいました。子供たちは腹がへったと言って泣くし、大騒ぎでした。そこで兵隊さんの米を河の泥水で炊いて、おにぎりを作って食べたときのおいしかったこと

を忘れることができません。そこに一日ぐらい居たと思いません。日本の機関車がピョウピョウと汽笛を鳴らして迎えにきてくれたときは、みんな嬉し泣きしました。それからまた夜走り、日中は草むらに隠れて、ようやく綏化という街に着きましたが、そこで日本の敗戦を聞き、みんながっかりしました。悲しく思いました。綏化にはひと月ほど居たと思います。そこから新京に行きましたが、みんなは日本に帰れるかどうかというところが一番の心配事でした。

その間も、兵隊さんたちが汽車でシベリアの方に連れて行かれるのを見ても、兵隊さんと話すこともできませんでした。

新京では、日本人の宿舎に住むことになり、高粱などを配給されて食べました。おかずは何もないので、子供たちが毎日のように死んでいきました。お母さんたちの泣き声を、毎日毎夜聞いていることはつらいことでした。山田さんの奥さんも新京で男の子を産み、産後の肥立ちが悪くて亡くなりました。私は、奥さんの死亡はとても悲しいやら悔しいやらで、言葉に尽く

すことができませんでした。

新京で、私の知っている人がたくさん亡くなり、困りの人も段々と少なくなってきました。

#### 四 奉天難民所

しばらくして、奉天に移ることになり列車に乗りましたが、山の中で止まってしまい、金を出さなければ走らないということで、みんな金を集めて出し、列車は走り出しました。

やっとの思いで奉天に着きました。奉天駅から難民所まではあまり遠くはないのに、私は二日も何も食べないで足がふらふらで歩けず、辰男を背負った人々でどの部屋もいっぱいでした。私は部屋の一番奥のほうに入ったので、便所に行くのも大変でした。寝るにも足を伸ばせずに縮こまり、十一月なのに部屋の中には板敷きで布団も何も無く、寒くて寒くてたまりませんでした。

私は、フミ子がいまいかと一時も忘れずに捜していました。満人たちも毎日来て、日本人の子供を欲しい

人や女を欲しい人でいっぱいでした。

私たちは、便所に行くにもふらふらとして足に力が入らないので、寝ている人の足を踏んだり、人の上に倒れたりしました。小便も我慢ができなくなってから行くので、人の上を歩くのに時間がかかり、便所まで行かないうちに漏らしてしまいます。そうなるともう恥ずかしさも何もなくあります。

毎日死ぬ人がたくさんで、朝起きてみると、あっちにもこっちにも死人がごろごろしています。虱がワサワサとたかりました。宗形さんが「みんな寝ていないで虱でも取れ」と号令を掛けますがだれも起きません。二部落長の奥さんが私を呼んで、「トシちゃん、私の虱を取ってちょうだい、気が狂いそう!」と云うので、私が紙を敷いて櫛ですくだけで、胡麻みたいな虱がバラバラと落ちてきます。頭の虱は手で集めるほどいました。

その奥さんも奉天で亡くなりました。大半の人は奉天で亡くなったのです。奉天の難民所は元日本人国民学校だったそうです。難民所の前に大きな穴が掘って



あり、死体はみなその中に投げ込まれました。

死ぬ人や、満人の家に行く人が多くなってきました。私も発疹チフスにかかっていたので、いつ死んでもよいと思い、弟の清たち「腹へった！」と泣くので、私も思い切って満人の家に行つて、何でもよいから食べ物ももらつてきてみんなに食べさせたいと思ひ、母に相談しました。母は「お前は日本には帰らないのか？」と言いましたが、私は「そんなことを言っていたら、みんな飢え死にしよう」と答えました。母はそれではと言ひ、私も満人の家に行く気になりました。

何日か前に、二部落の渡辺さんが子供三人を満人のうちに行かせ、妹がその家を知っていたので案内をしてもらいました。その時、私は小便を何度も漏らしてゐて、もんぺがぐしゃぐしゃに汚れていたので、母のもんぺをもらい重ねてはぎ、病気で歩けないので妹にすがつて、ふらふらしながら満人の家に行きました。

## 五 病氣の花嫁

渡辺清子さんのご主人の友達である紀文発と結婚す

ることになりました。私は病氣の体で結婚したので、思ったほど家の足しにはなれなかつたのが残念でした。虱がいっぱいなので中国服に着替えることになり、その後はずっと中国服で過ごしました。

そのうちに私を頼つて、二部落の宗形ヨシミさんが来て、板橋さんの奥さんや唐司さんの奥さんなど団の女の人が五人も来て、一緒に生活しました。私は病氣が少しよくなつてくると、もう満人が嫌で嫌でここから逃げ出したいと毎日思うようになりましたが、渡辺さんの満人の舅が毎日厳しく監視をしているので、どこへも行くことができませんでした。病氣だったので余計に夫が嫌で話もできないので叩かれたりして、本当に死にたいと何度も思いました。そのうちに板橋さんと唐司さんが越して行き、残つたのは清子さん、ヨシミさん、私の三人になりました。

真つ赤な夕陽が落ちるころ

思い出します故郷の山河

いつの日帰れる日を待てど

その日は遠く果てしない

泣きたくなるよな身のつらさ

父、母は大陸の土となり

別れ別れのきょうだいたちよ

泣いて暮らすか他国の土地で

私は悲しき残留婦人

私とヨシミさんは毎日話し合い、どうにかしてここから逃げて行きたいと思っていましたが、どうしても逃げられませんでした。

死ぬにも死ねず、毎日切ない思いで過ごしていました。死に神が憑く話がよく聞いていましたが、私にも死に神が憑いたのでしょうか、もう死にたくて死にたくて、みんなが死んで行くのに、私だけがどうして死ねないのかと考え悩んでいました。一度本当に死にそうになった時、気が付いて目を開けてみると、たくさんの満人が家の中にいて、「ああ、目が開いた」と言っていたことがあります。そのときはヨシミさんが、「トシちゃん、トシちゃん」と耳元で呼んだそうです。そしてもう一度だけ医者に診てもらうことになり、朝鮮人の老先生が診察しましたが、私の心臓がと

ても弱っているので心臓に効く注射をしてくれました。その後は段々と良くなってきました。

身体が回復してから、私は清子さんと二人で難民所に行ってみたところ、室内にはたくさんの人がいましたが、誰が誰だか全然分かりません。みんなは毎日火鉢にあたって顔を洗わないので、すすけて真っ黒な顔をして、目だけがきらきら光り私たちを見えています。私が母はどこだろうと捜していたら、母の声が聞こえました。「トシ、こっちだ、こっちだ、こっちに来い」と呼んでいました。よく見たら坊主頭で、髪の毛に虱がたかったので切ってしまったとのことでしたが、私にはどこのだれか分からないほどでした。

そのときは、母と清と辰男の三人がいて、清子さんのお父さんもいました。母が何かおいしいものを食べて死にたいと言うので、街に行つて焼きぎょうざを買つてきて渡しました。母と弟たちはおいしそうに食べました。

その次に難民所に行ったときには、辰男を満人にくれてやったと言っていました。それから数日たつてか

ら、平尾さんの子供が私のところに来て、母が死んだことを知らされました。私はすぐに難民所に行き、隣の人と二人で母の遺体を大きな穴の中に置きました。

次の日に清を連れに行つたとき、私が見たことは一生忘れることができません。

満人の馬車が三台ぐらいいて、それに日本人の死体を積んで運んでいるところでした。女の人を上積んだので、髪の毛がわんさと下がっているのを見たときに、私は、悲しみや悔しさが込み上げてきて涙が流れましたが、それを見て満人たちは笑っていました。春になつたのでどこかに運んで捨てるか焼くのだろうと思ひました。

私は清を連れてきましたが、私の夫は清までも育ててくれるほどの善人ではなく、夫の友達にやることとしました。清が連れていかれるとき、後を振り返り振り返り行くのを、私も姿が見えなくなるまで見送って家に入り泣きました。何で悲しいことばかりなのかと、とてもやり切れない思ひでした。

## 六 私の子供たち

私は女の子を三人と、その下に男の子を一人産みました。次に五人目の子を身ごもったときは、もう子供なんかいらなないと思ひました。夫は体が弱くそんなに働く人ではなかつたからです。

私の仲の良い日本人の友達で、子供ができない人がいるので「今度生まれた子供は、あなたにあげる」と約束しました。その人は喜んで、産着や小さな布団などを私の家を持ってきました。そのころ私の息子は六歳ぐらいでしたが、「赤ちゃんが生まれても、どこにもやらないで！ だから品物は返して」と言うのです。私は女の子を産みました。友達が一月は母乳を飲ませてと言っていたので、ひと月私の乳を飲ませて、いよいよ子供をやる日がきました。長女に、息子を遠くに遊びに連れて行かせた後、私が赤ん坊を抱いて迎えに来た友達と家を出ると、近所の満人が涙を流して見送ってくれました。私は赤ん坊を友達に渡して帰るとき、後ろ髪を引かれる思ひで涙が止まりませんでした。家に帰った息子は妹がいなないのに気付き、転

がって泣きました。妹が欲しいと泣く子を抱いて、私も一緒に泣きました。

その後、中国の役所の人が私を訪ねて来て、「あなたの乳は良い乳でもったいないから、よその子に乳をやりなさい。そうすればお金も入るから」と言われ、役所の紹介でよその子を預かることになりました。

私は息子をだまして、「妹を連れて来るからもう泣くな」と言って、男の赤ん坊を連れてきました。息子は見分けがつかないで、妹だと思って喜んでいました。私は自分の子をよそにやって、よその子を抱いて乳をやっていると思い、泣きながら授乳していたら乳が止まってしまい、どうしようと悩みました。それからいろいろなことを教えてもらって、やっとまた乳が出るようになりました。

その赤ん坊のお父さんは中国の公安局の役人で、お母さんは産後すぐに病気になるに困っていたそうです。その子は私の乳ですくすくと成長して本当にかわいの子供でした。私の家に六歳ぐらまでいて、私をお母さんと呼んでいましたし、私も自分の子供と同じに扱

っていました。そのうちに、その子が連れて行かれる日がきました。私は、また悲しい思いをし、もう二度とよその子を育てることはしないと誓いました。その子も家に帰ってから何日も、夜も寝ないで泣いていたそうです。

私はその後また男の子を産みました。夫は病気であまり働けないので、子供四人が学校に行くころは本当に生活に困りました。

夫の勤めていた工場は、二千何百人もいる大きな国营工場でした。子供が多くて生活に困っている工員の家族を採用することとなり、私も働けることになりました。工場の総人員二千何百人の中で私一人が日本人でした。

私は、日本の女は本当に良い人だと言われたいたために、人の嫌がる仕事まで一生懸命に働きました。その結果いつも褒美をもらっていました。褒美は一等、二等、三等とあって、私はいつも一等賞で、上の人からも下の人からも良く思われていました。四人の子は学校で、末の子は近所に頼んでいましたが、朝早く工場

に行く私を送っていて、「母さん！ 母さん！」と叫んでいた声が今でも耳に残っています。

## 七 漢字の学習

昔の中国人の女は、学校に行かないので自分の名前も書けません。私もあまり学校には行っていませんが、見て書くなら人の名前ぐらいは書けたので、工場で五十人の組長にされました。そのころはちょうど中国の文化大革命のころでしたので、共産党員は毎日、仕事が終わって家に帰る前に学習がありました。毛沢東の思想を学ぶので、それをみんなに読んで聞かせるのです。私は夜、家で子供たちに聞いて漢字を習って漢字に仮名をつけて、翌日工場に行ってみんなに読んで聞かせました。

しかし、毎日泣きたくなることでいっぱいでした。私がつらかったのは、終戦のころよりも中国人と結婚して子供ができてからでした。子供たちは学校で「日本人の子」と言われていじめられ、帰ってからも近所の子からいじめられ、子供が外へ遊びに出るときには私もついて行きました。

日本の田中角栄首相が中国に来て、日中共同声明を発表してからは、あまり「日本人の子」とは言われなくなりました。

田中首相が中国に来ると聞いたとき、私たち中国残留の日本人がどんなに嬉しかったか。私たちは、日本が戦争に負けたあと、日本国内がどうなっているのか分からず、帰る気持ちも薄れていたのです。私がちょうど三人目の子供を産んだばかりのころでした。日本人の引揚げが始まると知って、本当はどうしようかと悩みました。懐かしい日本に帰りたいが、三人の子供はどうしよう。夫とは別れることはできても子供はかわいくて、どうしても帰る気になれませんでした。私は八歳のとき母に死なれたので、母亡きあとのその寂しさを今度は我が子に味わわせることができなかつたのです。日本の姉からも度々手紙が来て、「弟の清と二人で帰って来い」とありました。

日本人の友達が私の家が集まっていると話合っていたら、近所の中国人が来て、「あなたが日本に帰ったら、もう家の中はめっちゃめっちゃになる」などと

言って泣いています。「どうして日本に帰るのか？生活に困って帰るならみんな何とかがしてやるから」とも言っていて、みんなで金を集めて私の家を持ってきたのです。そんなみんなの善意の手前帰れなくなり、日本の姉に「どうしても帰れないから、私を死んだと思って」と手紙を書き、もう帰らないつもりでいました。

私が初めて姉に手紙を出したのは、国民党のころで、一人目の女の子を産んだころです。日本は戦争に負けて今ではどうなっているのかも分からないし、中国からの手紙も届くかどうか分からないけれど、試しに出してみたのです。その後半月ぐらいして姉から返事が来たので、私は嬉しくてみんなに見せて喜びました。姉の夫も海軍にいて無事に帰ったこと、今まで私が捜していた妹のフミ子も日本に帰ったことなどを知り、嬉しくて眠れないほどでした。どうしても一度は日本に帰ってみたいと思うようになりました。

#### 八 里帰り帰国

ある日、私が工場から帰ったら「日本に帰れるから

手続きをしなさい」と、日本大使館から手紙が来ていて、本当に嬉しくて夜も眠れませんでした。しかし、私の娘たちは心配して、私が日本に帰ったらもう戻って来ないのではないかと思っていたそうです。工場でも喜んでくれ、政府も手続きをしてくれました。

私は一番下の息子を連れて、北京空港から生まれて初めて飛行機に乗りました。富士山が見えたとき、日本に帰ったのだと涙が止めどもなく流れました。

成田空港では姉と義兄が迎えてくれました。「姉さん！」と言ってまた泣きました。姉が「半年いられるのだから安心して」と言いました。郡山駅に着くと、市役所の方や、親戚や、引揚者の人たちがたくさん私を出迎えてくれました。懐かしい人の顔を見て、涙、涙でした。姉の家に着いてからも、いろいろと歓迎されありがたいことでした。息子も日本語はできないのですが大槻の小学校に入れてもらい、毎日通いました。

電話もたくさんかかってきて、姉が「トシに電話だよ」と言って受話器を渡され、反対に持ってしまい、

「聞こえない」と言うので大笑いされました。浦島太郎そのものでした。

町も、家も、人々の服装も、昔とまるで違ってしまい驚きました。私の生まれた富岡に行ったら、家の柿の木がまだあったので涙が出るほど懐かしく、子供のころを思い出しました。

月日の経つのは早く、日本に来て十カ月が過ぎ、そろそろ中国に帰る準備をしました。みなさんから品物や饞別を頂き、何もかも中国に持って帰りたいものばかりでした。会うのは嬉しいが別れはつらく、姉の子供たちと泣き泣き別れて郡山を出発しました。叔父さんも成田まで見送ってくれましたが、それが最後の別れでした。

北京の空港から汽車で瀋陽に着いたとき、家族が駅に出迎えてくれ、嬉しくて涙が出ました。みやげ物はいっぱい、自転車なども手に入らないので、私は自転車一台、それに腕時計やその他の品物をたくさん持って帰ったので娘たちは大喜びでした。

いつも貧乏だった私の家ですが、日本に一度帰った

おかげで借金もなくなりました。日本の良いところを見てきたので、帰ってから何日も食欲がなく、別れてきた人々の顔が臉に浮かんで悲しくなりました。姉や友達に手紙を書くにも何と書いてよいか思案し、泣きながら書いていました。

その後、私が工場に行ったら、みんなも涙を流して喜んでくれ、それから段々と日本を思い出すことが少なくなりました。工場では組長を続けて一生懸命に働きました。

## 九 永住帰国

昭和五十六年に、私は第二回の里帰りて再び日本に行きました。そして子供たちも大きくなったしと考えて、日本永住を決め中国には戻らないことを決心しました。

中国にいれば日本が恋しいし、日本に帰れば中国に残した子供たちを思うし、本当にどうしようもない心境で悩みました。

弟の清は、私が最初に里帰りしたすぐあとに、永住帰国をしていました。

中国からは残留孤児がたくさん日本に肉親を捜しに来るので、私は下の弟の辰男はどうしているかと案じていました。もう死んでしまったのかとも思っていました。ある朝、ご飯を食べながら残留孤児のテレビを見ていたら、「私の父は馬車にひかれて死んだのです」と言ったので、ハッと気付いてよく見ると弟の辰男らしいのです。

辰男とは五歳のとき別れたのですが、いろいろな事を覚えていたのですぐに分かりました。私は引揚者団体の会長さんに電話をしてすぐに東京に行き、辰男と会うことができました。辰男は「こんなに兄や姉がいるとは知らなかった」と言って、泣いて喜びました。辰男を福島に連れて来ました。姉の家では毎日大勢の人が来て喜んでくれました。みなさんから饑別をもらって中国に帰りましたが、一度日本の生活を知ったらどうしても日本に帰りたくなり、家族を連れて引き揚げ、今では幸福に生活しています。

私たちの父母は中国で死亡しましたが、兄弟姉妹は皆元気で帰ってきました。その中で私が一番不幸だっ

たかもしれません。中国に残した二人の子供をいつも忘れることができないのです。

今でも、まだまだ多くの残留孤児や残留婦人がいますが、私はその人たちに伝えたいと思います。「私のように別れ別れにならないように、中国で暮らすなら親子一緒に中国で暮らす。日本に帰って来るなら、家族全員が帰って来れるようにしてください。別れ別れになって悲しい思いをしながらか暮らすより、貧しくても親子一緒に仲良く暮らすことが、一番の幸福だと思います」と。

恋し懐かし祖国に帰れども

中国に残した我が子を思い

夜も眠れぬ悲しさ多く

私の悩みいつまで続くのか

いつの日だんらん出来るやら

神に祈る我が姿

中国で国民党軍と共産党軍の戦争のころに、私たちは食糧にずいぶん困っていました。そういう時代に中国に残留した私たちが、どれほど苦勞したか、日本に



いた人たちには分かってもらえないことでしょう。

また、多くの日本人が志願してまでも、お国のためにと兵隊になったり、開拓団員となったりして国を出て行き、そして「万歳！」と言って亡くなりました。

戦争と、それが原因となって起きた数々の悲惨な出来事。それらを思い出すと胸がしめつけられます。

その中でも特に、女の運命は言うに言われぬ悲しさがいっぱいです。

不幸をもたらす戦争が、二度と起こらないように祈るばかりです。

## 恥辱の青春

茨城県 成松 新

### 一 旅順への道のり

私の父新市は、佐賀市内で小間物屋を営む元佐賀藩士族成松儀平の第九子として、明治二十四年に生まれた。六歳で父を亡くし、十八歳のときには母が急逝、

さらには三人の姉を除く兄たちも早世していた。この不遇を転機に、生家を処分し長崎の造船所に勤務したのであった。

大正三年、第一次世界大戦勃発。これに参戦した日本は中国山東省青島のドイツ軍を攻略した。父は鉄道連隊に随行し、大陸への一步を踏み出したのである。

勤務に慣れたころ、いわゆる三國干渉による撤収で、通信省に移籍、新任地の四平街で同県人の妻をめぐり、長女が生まれた。お役所勤めが苦手な父は、当時としては珍しいアマチュア写真への応募を動機に、旅順で写真館を開業したのである。

大陸に活躍する邦人が、故郷への便りに添えたい晴れ姿としての写真。昭和の初期、数少ない写真館は大いに繁盛した。しかし、生後間もない男児の死去、その半年後には妻が他界するという不幸が重なった。一年後、茨城県出身の尚子を後妻に迎えた。

昭和七年、国内では五・一五事件、ヨーロッパではヒトラーが独裁体制を確立し、そして満州国が承認された。激動のこの年に私が生まれ、次いで昭和十二年